Japanese Association of Educational Psychology

類したものである．次に繁多（伊豆長岡児童福祉園）や山下（熊本大）は，親子言語関係診断テスト作成の「ねらい」について質問した．米国の著名な言語病理学者，Wendell Johnson は発吃理論として，Diagnosogenic theory を提唱したが，この見地から，内須川も，吃音診断研究の一環として，「親子吃音関係診断テスト」を試作した．しかし，このテストでは対象のコントロールとして正常児を使用できないので，正常児の言語関係の状況を把握し，対比しうる資料を求める必要上，親子言語関係を作成した．次に，内須川の言語関係で問題とされている言語の内容に関する質疑が，松島（共立女大），筒井（信大）からなされた．前者は言語の抑揚・声量などを取り扱うのか，後者は地方語などを内容として取り上げるのかを問うものであるが，この言語関係は，広く一般的言語を媒介とする言語関係を問題とする旨返答があった．

最後に八重島（神戸大）・鈴木（家政大）の共同研究に関して，中沼（京都保育専門学院）は，役割の認知・対人認知ということばで十分で，同一視ということばを使用しなくてもよいのではないかと問うた．これに対して八重島は，（時間が残されていないので）次のように答えた．数年前「教育心理学研究」に掲載された柏木助教授（東女大）の「同一視の最近の研究に関する文献総覧」を参照されればその主旨が諒解されよう．非常に大胆に表現することが許されるならば，父—母—子関係という三者関係の枠組みの中で，われわれの究極的なテーマである人格形成の力学を考究しつつある学徒としてのフィロソフィであるとご理解頂きたい．

（八重島建二・内須川　洸）

8 社　会（3）

831 交友関係における親密度の測定に関する研究（2）
—大学生の交友関係における親密性の強さと質についての調査—
田中祐次（信州大学）

832 被説得性に関する研究（4）
—友人関係と被説得性—
稲越孝雄（東京教育大学）

833 「対話頻度分析法」について
森正義彦（岡山大学）

834 発表取消

835 集団準拠の構造・機能に関する発達心理学的研究
—問題領域次元との関連による分析—
安藤延男（九州大学）

836 二者関係における対人感情の認知
長田雅喜（岐阜大学）

837 社会測定的地位と自己概念
○玉瀬耕治（奈良教育大学）
上田敏見（　〃　）

838 PM 式リーダーシップ訓練技法の研究 Ⅳ
三隅二不二（九州大学）

839 心理学実験における「計画された影響者」としての実験者の訓練
鈴木康平（熊本大学）

I 全体的特徴

本部会では“対人認知・交友関係”“意見・行動の準拠・変容”“指導者・実験者の訓練”の分野に関する発表が行なわれた．“対人認知・交友関係”においては，その測定のあり方，測定された地位と自己概念，感情の認知，の諸研究が示され，“意見・行動”の面では，被説得性からと，集団準拠からとの考察が行われ，“訓練”については，リーダーシップ訓練技法に関する企業組織における現場研究と，実験室的研究の中におけるリーダーとしての実験者の訓練方法が論ぜられた．

討論の主眼は，社会心理学・集団力学的なアプローチが，教育心理学的研究としてどのように位置づけられるかに関して論議がつづけられた．

II 討論の内容

—<感情の認知>—

長田（836）の研究に対して，大橋（福井大）は，F_1（他者に対していだく感情）と F_2（他者が自己に対していだく感情）のほかに，F_3（F_1 が他者の側にどのようにうけとられているかの自己による推測）を導入してきたことは興味深いが，F_3 の扱われ方が副次的である．F_1 F_2 F_3 は同列に扱われるべきであろうと問うたのに対して，長田は Tagiuri の用法に厳密に従えば，F_1, F_2 でもって incongruency がどのように生じてくるかに

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ついての説明は，認知以外の要因（たとえば自尊心など）でなされることが多い．これらを考えに入れる以前に F_1, F_2 のような第1段階の認知だけでなく，第2の水準の認知，いわゆる F_3 のようなものを今後はもっと積極的に考察の対象としていきたいと答えた．三隅（838）は，F_3 の変化にともなって F_2 の符号もかわるという点からすれば，F_3 について適切な feedback が行なわれた時には対人認知に変化がもたらされることがあるかと質し，原岡（佐賀大）は F_1 と F_2 の結果として F_3 がでてくると考えるかと質したのに対して，長田は，“同時的に”という表現をしたいと回答した．

―<好悪感情の取り扱かいの一般論>―

藤野（熊本大）は，一般的に対人認知の研究では，好きは＋，嫌いは－として処理しているが，＋から－へ変化するといっても，そもそも＋の反対がそのまま－であるとは限らない．あまりに単純化しすぎていないか，と問うたのについて，長田は，たしかに－の感情は overt に表現されにくく，その表出をちゅうちょする傾向があるらしいことからも，＋の丁度反対であるとはいえないとのべ，大橋も，三者関係における場合にも，R_1 が－の時は Heider のいう－だけではないとする説もあるし，－というのは本当の意味の unit を完成しないとする考えもあるようだが，だからといって藤野のいう性質ばかりをもつとも断言はできないと所見をのべた．

―<認知の背後にあるもの>―

森正（838）は，対人関係の研究においては，もっと，認知を成立させているところのメカニズムを追及する必要がありはしないか．たとえば，なぜそれをそうみようとしているか，どうしてそうみるかという動機づけ的なものを追及してみる必要があるとの見解をのべた．三隅はこのことを，対人関係の研究には，行動観察（を通してうる情報の貴重さ）をより主張すべきであろうかと問題提出した．長田は，overt behavior と sociometric-level での対人感情とでは次元がちがっている，両者は対応しきれないものがあると考えると述べたのに対して，大橋は，両者がきっぱりとちがう，あれとこれとはちがうというのは疑問だとのべ，さらに森正は，むしろ，overt なもの（行動）を追及しなければ，本来のものがつかめない．両者の橋わたしの研究が必要であると主張した．また，田中（831）は，やはり人間は behavior の level とか perception の level とかいったことで研究の主眼や，えられた資料の解釈がかわってしまうほどにバラバラのものではない，overt behavior⇄感情という相互作用のうえにあるものが人間なのではないかと述べ，森正も，overt な level と perception（cognition）の level とを混同してものをいってはいけないが，overt と covert との関連性の追及は必要であると強調した．

―<Personality と対人認知>―

三隅は，では personality と対人認知との関係はどのようなものだろうかと質した．稲越（832）は personality が社会的な認知の中に（浮きぼりにされて）出てくるのには，かなり長期的なものを予想しておかねばならないだろうと述べ，田中も，従来の成果をみていても，この問いに関する適確な実証資料はみあたらない，好きを単純に＋，嫌いを－とだけいっているのはどうもピンとこない，もっと personality にかかわりのある，質的な factor を入れたい，という意見をのべた．森正も，それには賛成だが，どこかの level で測定ということをしないと，いたずらに複雑になるばかりだ，＋，－だけの測定以外に，もっと現実的な strategy を（たとえば対話頻度）とり入れた実際場面にあう方向の研究が望まれるといい，三隅も，そのように，strategy が入ってくると教育心理学の分野の大切な研究になってくると所見をのべた．田中は，自分もその方向のつもりで仲よしとひと口にいっているものを分析考慮しているといい，原岡も，たしかに交友関係には次元が多くある，かって感情，地位，コミュニケーション，権力の各構造を精査し友人関係を分析してみたことがあるが，とくに感情面の構造は動揺著しく地位のそれは安定している結果を見出したとのべた．

―<実験者の訓練と sensitivity>―

議論が鈴木（839）の研究にむけられた．塩田（名古屋大）は，鈴木は実験者の訓練を効果あらしめるものとして，被訓練者の自己の認知，他者の認知，それの認知のあり方をとぎすますことにあるとの仮定をもっているようだが，前からの議論にあったところから，認知の確かさの向上にともなう overt behavior の変化，対応をどう考えているかと質した．

これに対して鈴木は，研究の主題は実験者が実験事態の中のひとつの要因になっていることの重要性に目をむけたもので，研究が要求する通りの存在の実験者を育成することをねらっているが，実験者がどのような存在であったかは，被験者の認知に依るものである．故に実験者としては自らが如何に見られているかと，同時に被験者の心情も認知するように，いわば観察の基本を強く身につけさせるということで，VTR など補助に使っている段階だが感受性の高まりにつれて態度の変化も認めら

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

れ効果は生れつつあると推測すると答えた.

—<実践の中からさらに理論を>—

現場での PM 式リーダーシップ訓練技法の開発に関した三隅の研究について藤野は監督者の各層の型と生産性の関係を問うたところ，三隅は，第一線監督者—従業員の関係のみでなく Top—Middle Management—第一線—従業員といった系列の上での，PM. P. M, pm の組み合わせと生産性についてはすでに一部資料をとってあり，検討も加えているが，より包括的な内容の理論の構成をめざして努力していくとのべた.

最後に牛島（青山学院大）は，全体にわたる所見として対人認知の問題は幼児の場合には overt なものでcovert な方の推察も比較的容易であろうと思われる. また感受性の訓練や認知の feedback のさせ方の研究が，児童の（問題）行動の治療と結びついていくと教育的にも更に意味のあるものがでてくると思う. その方面への発展も期待すると結んだ.

（三隅二不二・鈴木康平）

9 特殊教育（1）

911 精神薄弱児職業教育体系化のための基礎的研究（5）
—問題と研究計画—

○松岡　武（山梨大学）
飯田貞雄（〃）
高野　武（〃）
小野　環（〃）

912 精神薄弱児職業教育体系化のための基礎的研究（6）
—職業的自立に必要な基本適性の内容把握—

○飯田貞雄（山梨大学）
松岡　武（〃）
高野　武（〃）
小野　環（〃）

913 精神薄弱児職業教育体系化のための基礎的研究（7）
—職業適性の主要特質の所持実態に関する検討—

○高野　武（山梨大学）
松岡　武（〃）
飯田貞雄（〃）
小野　環（〃）

914 精神薄弱児の臨床教育心理学的研究（第5報）—(1)

○伊藤隆二（神戸大学）
田川元康（大阪府立堺養護学校）
佐藤靖彦（大阪市立大学）
寺田　晃（神戸大学）

915 精神薄弱児の臨床教育心理学的研究（第5報）—(2)

○田川元康（大阪府立堺養護学校）
伊藤隆二（神戸大学）
佐藤靖彦（大阪市立大学）
寺田　晃（神戸大学）

916 精神薄弱児の臨床教育心理学的研究（第5報）—(3)

○佐藤靖彦（大阪市立大学）
伊藤隆二（神戸大学）
田川元康（大阪府立堺養護学校）
寺田　晃（神戸大学）

917 精神薄弱児の臨床教育心理学的研究（第5報）—(4)

○寺田　晃（神戸大学）
伊藤隆二（〃）
田川元康（大阪府立堺養護学校）
佐藤靖彦（大阪市立大学）

I 全体的特徴

山梨大学グループの「精神薄弱児職業教育体系化のための基礎的研究」と，神戸大学グループの「精神薄弱児の臨床教育心理学的研究」の2つの大きな共同研究の発表に対する質疑応答が活発におこなわれた.

山梨大学グループの研究は特殊学級卒業生の職場での適応要因を分析することで，精神薄弱児の職業教育を体系化するための基礎的資料を求めようとしたもので，主として，テスト・調査方法によっている. すなわち，特

NII-Electronic Library Service